

〔研究ノート〕

流通科学部海外留学スカラーシップ制度の現状と課題

The Current State and Issues Regarding the Overseas Scholarship Program in the Faculty of Business, Marketing and Distribution

中村学園大学 流通科学部

池田 祐子

1. 流通科学部海外留学スカラーシップ制度の現状

流通科学部では平成21年度より海外留学スカラーシップ制度を実施している。開始時から徐々に留学先を増やしてきた本制度は、平成29年度に海外留学支援制度（JASSO）協定派遣学生交流促進タイプに採択され、平成31年度も継続して奨学金が配当されることが決定した。平成30年度は7名の奨学生を協定校に派遣しており、海外留学スカラーシップ制度利用者の総数は56名となった。

年度別スカラーシップ奨学生の数、期間、行先は以下のとおりである。

本制度はアジア圏への留学から始まり、次第

に英語圏への留学生が増加した。治安や国際情勢もあり留学希望者の減った年度もあるが、平成30年度は中国・韓国・カナダ・ニュージーランド・アメリカの協定校10校を派遣先とし、中国・韓国・英語圏に奨学生を派遣している。なお、留学先として英語圏の人気は高いものの、学内で実施している語学カフェやぐるーばる広場では韓国語の受講者が多い。若者の間で韓国のエンターテイメントが流行していることから、韓国語を学びたいという学生の数は増加傾向にある。

近年、流通科学部では海外留学スカラーシップ制度を理由に本学を志願したという学生が増えつつある。平成30年12月実施のスカラーシッ

年 度	中国	韓国	カナダ	ニュージーランド	オーストラリア	アメリカ
平成21年度	1 (1)					
平成22年度	2 (1)	2 (1)				
平成23年度	4 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)		
平成24年度	2 (1)	1 (半)	2 (1), 1 (半)			
平成25年度	1 (1)	1 (1), 1 (半)	2 (1)		1 (半)	
平成26年度				2	1 (1), 1 (半)	
平成27年度		1 (半)		1 (半)	1 (1), 1 (半)	
平成28年度	1 (1)	1 (半)			1 (1), 1 (半)	1 (1), 1 (半)
平成29年度	1 (1), 1 (半)	1 (半)	2 (半)		3 (半)	1 (1)
平成30年度	2 (半)	1 (1)	2 (半)		1 (半)	1 (1)

※ () 内は半年または1年の留学期間を指す

ブ制度説明会には34名が出席、さらに3名が事前に欠席の連絡を入れるなど、昨年度の3倍近い参加者がおり教室の椅子が足りないほどであった。グローバル人材育成プログラムの円滑な実施を目指すなかで、語学が好きな高校生の興味を喚起する本制度は、流通科学部の特長の一つになっていると言えるだろう。

一方、栄養科学部と教育学部ではN-HALプログラムが開始している。これは語学の習得のみならず、学生が自ら定めた明確な目的と意欲的な目標に基づき立案した実践活動をサポートする奨学金制度である。さらに、フードマネジメント学科では食のスペシャリストを目指すダブルディグリー留学プログラムを実施している。両者とも流通科学部のスカラシップ制度同様、JASSOの協定派遣学生交流促進タイプに採択されている。

他学部で特徴的な留学制度の施行が続くなかで、今後は流通科学部も学科の特性を生かした留学システムを構築していく必要がある。そこで、平成29年度スカラシップ制度利用者のうち、英語圏のクイーンズランド大学（オーストラリア）、アーカンソー大学（アメリカ）、サイモンフレイザー大学（カナダ）に留学した4名に協定校についての聞き取り調査を行った。現在、特に英語圏の協定校が多いため、学生にとって選択肢が広がるメリットはありつつも、協定先に安定的に留学生を派遣できているとはいえない。学部としては、より良い協定校と信頼ある関係を築き、本制度を利用した学生の満足度を高め、実り多い留学としたい。聞き取り調査を通して、現行の海外留学スカラシップ制度の現状と課題を明らかにし、今後のスカラシップの在り方を検討したい。

2. 聞き取り調査

2.1 クイーンズランド大学 ICTE（オーストラリア クイーンズランド州セントルシア）

The University of Queensland, Institute of Continuing & TESOL Education

クイーンズランド大学はクイーンズランド州最古の大学で、オーストラリアのトップ8大学のうちの1校である。世界大学ランキングでも常に高順位であり、高い評価を受けている。140カ国からの12,500名を超える留学生を含む50,000名以上の多様な学生が在籍している。

付属のクイーンズランド大学付属英語学校（ICTE-UQ）は、1981年に創立されたクイーンズランド州で最も歴史のある政府認定の英語学校で、全校生徒数は約800名である。緑豊かで美しいキャンパスは、ブリスベン市内からバスで15分の場所にあり利便性が高い。

ICTEの英語コースにはGeneral English [GE]、Advanced English Communication Skills、English for International Business Communication、English for Academic Purposes、Bridging English Program、English for Academic Communication、Go Globalがある。ただし上級レベルではIELTS等のテストスコアが要求される。現行の流通科学部海外留学スカラシップ制度では、上級コースに必要な検定試験のスコア提出を要件とせず、自動的にGEコースに配属される。

ICTEは少人数制の対話型クラスを重視しており、1クラスは18名以下である。GEコースはレベル5までが座学で、レベル6、7がプレゼンテーション中心になるという。授業は午前中もしくは午後を選択できる。日本人留学生数は2月、8月に増加し、1クラス中16名が日本人の月もある。逆に12月は日本人が1～2名に激減し、代わりに韓国人のクラスメートが増えるなど、授業期間によってクラスメートの国籍に偏りが見られる。

ICTEでは学生たちのアクティビティが盛ん

である。スカラーシップ生はコーラスクラブに入り、学内や学外施設で発表を行うなど活発に活動していた。UQの大学生を中心としたWASABIという文化交流サークルでは、日本人と現地の人々が英語と日本語を教え合う。以前ICTEに派遣したスカラーシップ生からは、学生主体のチャリティイベントにボランティアスタッフとして参加し、現地でスポンサー等を募りながらイベントを成功させた事例も報告されている。学生主催のイベントが豊富にあり、幅広い活動を通してUQの学生だけでなく地域民との交流が可能である。学生の学びが教室英語や座学に留まらず、キャンパス外での活動を含んでいることから、留学受け入れ先としては非常に望ましい環境である。

都市に近い学校への帰りに州立図書館に気軽に立ち寄ることができ、美術館や劇場などの芸術に触れる機会が多くある。州立図書館にはConversation Clubがあり、南米、アジア、ヨーロッパ等、様々な国籍や年齢のメンバーが集まる。本学の学生たちも英会話の勉強のために参加していた。なお、UQにはアジアと南米からの留学生が多い。文化的に恵まれている一方で、キャンパス周辺は自然が豊かであることから、学ぶ環境としてスカラーシップ生には評判が良い。授業料には教科書代が含まれており、学内の無料Wi-Fiもつながりやすく、学習環境が整っているという。

学生にUQ生活における不満や改善してほしい点を尋ねたところ、現地ではボランティア活動を単位認定できるが、留学期間が短く申請が出来なかったという。その他は、ホームステイ先でのシャワー時間の制限や、他国からの留学生との相互理解の難しさなど、どこに留学しても聞かれるような不満はなく、総じて良い環境で学べたと高評価であった。しかしクイーンズランドへのスカラーシップ派遣は、平成30年度で終了することが決定している。治安がよく、留学先として人気の高いオーストラリアで、

クイーンズランド大学のように修学環境の整った大学と新たに協定を結ぶことが望まれる。

2.2 サイモンフレイザー大学（カナダ ブリティッシュコロンビア州バンクーバー）

Simon Fraser University (SFU), English Language and Culture Program (ELC)

サイモンフレイザー大学は、ブリティッシュコロンビア州に1965年に設立された学生数約35,000人の総合大学である。カナダのニュース雑誌『Guide to Canadian Universities』ではカナダのトップ大学の一枚としてランク付けされている。付属の語学学校はバンクーバーのダウンタウンのウォーターフロントに近く、交通の便が良い。

ELCのプログラムは7段階のレベルに分かれており、1クラス18名までの少人数制である。授業は1限から4限まで行われるため、午前のみ、あるいは午後のみ授業を行う語学学校よりも授業時間が長いという利点がある。Listening、Writing、Oral Skill等の一般的な授業の他に、ニュース記事を取り上げるNews Media、アメリカ文学やノーベル文学賞を教材とするLiterature、カナダの歴史や地理について調査しプレゼンテーション課題に取り組むCanadian Studyを履修することができる。なお、金曜日は通常授業から離れて、映画、ビジネス、文法、TOEFLなどの選択科目を履修することができる。聞き取り調査を行ったスカラーシップ生の一名は前学期に映画、後学期にビジネスを選び、もう一名は前学期、後学期ともにビジネスを選択していた。これはMarketing Basicsとして中小企業の調査を行う授業で、学期が変わっても内容は変わらない。授業ではウォーターフロント地区のコンサルタント会社を訪問し、社員から話を聞いてCMのマーケティング手法について学ぶ。学生によれば、流通科学部で既にマーケティングの基礎を学んでいるため、英語でマーケティングの授業

を受けても理解がしやすく、このような授業をもっと受けたいということであった。ビジネスの授業は難易度が高いが、その分受講のしがいがあるということで、サイモンフレイザー大学に留学するスカラシップ生には、この情報は提供の価値があると考えられる。なお、毎年、日本の私立大学が約30名の学生を4学期間にわたってELCに派遣しており、上位クラスになるとクラスメートのほとんどが日本人になるという実態がある。

ELCの学生は基本的にホームステイである。多民族社会であるバンクーバーのヴィジブル・マイノリティはアジア系が高い比率を占めており、Citizenship and Immigration Canada (2016) のデータによると2015年のブリティッシュコロンビア州への移民は77.3%がアジア系である。ファミリーのルーツは様々であり、ホームステイを通して学生は多様な文化的背景に触れている。家庭料理にはその家独自の特徴があるものの、フードコートやレストランが充実しており食に対して不満の声は聞かれなかった。

ELCのアクティビティとしてMuseum VisitやCanada Walkingが挙げられたが、クイーンズランド大学ほどアクティビティが盛んではないようである。ELCが入っているビルでは、サイモンフレイザー大学の学部生との交流はなかったとスカラシップ生二名とも述べており、大学のメインキャンパスから離れた立地が原因と考えられる。一年の長期留学にサイモンフレイザー大学のELCを選んだ場合、学生の交流範囲を考えると、大学付属の語学学校という利点を十分に生かしきれない懸念がある。ホームステイ先では他国からの留学生(ELCの学生に限らない)と知り合う可能性は高く、学外のコミュニティとの交流の場はあるようだが、サイモンフレイザー大学の学部生との交流もあれば、より望ましいと言えよう。

学生からの第一の要望は、留学期間の改善であった。この年に半年コースで派遣された学生

の留学期間は、実質4か月であった。平成30年度の派遣生からは改善され、留学期間は9月から3月までと、6か月に延長されている。このような変更点は、留学に関する学生からの質問を教員が受けることも多いので、早い段階で学部全体に共有される方がよい。なお、4学期(約一年)にわたってELCで学ぶのは長すぎるといふ留学生の声を現地で聞いたとの報告がある。ELCで勉強するのは2学期で十分であり、それ以降は高度な専門的授業を求めて別の専門学校に移る方がよいというのがELCで学んでいる学生の本音だといふ。

語学学校としての質についても学生から不満の声が聞かれた。学期によって授業満足度に差があるので、もっと良い語学学校があるのではないかという意見である。ただしこれは語学学校に限らず、大学であってもクラスによって授業満足度に差が出ることはあり、それだけで語学学校の質を断じることはできない。しかしクラスの大多数を占める中国人留学生の授業態度が不真面目で、授業の雰囲気が悪くなかったとの報告があった。バンクーバーという土地柄、どの語学学校でも中国からの留学生は多いと思われる。バンクーバーという都市の特徴として、学生にあらかじめそのメリットとデメリットの両方を伝えておくといふだろう。

また、留学先で専門に関する授業を受けたいという声が学生から聞かれたことは、今後の流通科学部のスカラシップ制度の在り方を検討する際に重視したい点である。

さらに、留学前の手続きと学習について検討してもらえると嬉しいとの要望があった。一点目は入学前の手続き(協定校の保険への加入)を教職員に手伝ってもらいながら進めたいということである。渡航手続きに関しては、国際交流課ができる以前から、教員が手助けしながら基本的に学生主導で進めるという手法を取ってきた。学生の自立心を養い、全て英語で行う異国での生活に備えるためであるが、どの程度教

職員がサポートするかについては今後の検討課題としたい。二点目は英語の事前学習の機会が欲しいという要望である。中国と韓国への派遣生は直前に集中講座があるため、学生間に不平等感が生まれている。語学カフェやぐるーぱの広場があるにも関わらず、スカラシップ生の中でそれらの活用が浸透しない理由については意識調査が必要である。

2.3. アーカンソー大学（アメリカ アーカンソー州リトルロック）

University of Arkansas at Little Rock (UALR), Intensive English Language Program (IELP)

アーカンソー大学は1871年創立された総合大学である。大学は様々な背景を持つ学生をより多くキャンパスに迎え入れることを目指しており、Princeton review 誌により2006年に全米361の優良大学に選ばれている。リトルロック校はメインキャンパスではなく自然豊かな環境にあり、学生の構成比は白人系が58%と半数以上を占め、アジア人は2%と少数である。

およそ40年の歴史をもつ付属語学学校 (IELP) は、スカラシップ生の報告によれば3段階のレベルに分かれている。プログラム開始当日にプレイスメントテストを受験し、レベルと学生のニーズに応じて基礎 (Foundations)、中級 (Intermediate)、大学準備コース (Pre-University/Test Preparation) のいずれかに属する。基礎コースでは基本的な語彙や文法、会話、短い文章の読解、パラグラフライティングを学ぶ。中級ではリサーチの仕方やエッセイライティング、物語や本の読解、長めの会話やフォーマルなプレゼンテーションを学ぶ。大学準備コースでは、アカデミックなリサーチや読解、ライティング、ニュースや講義のリスニング、プレゼンテーションにディベート、大学入学のためのテスト準備が行われる。正規の授業は午前中のみであるが、午後に無料で追加授

業を1時間受けることができる。

スカラシップ生のクラス構成は、日本人、ベトナム人、韓国人が各1名ずつの計3名であった。当時の学生数はIELP全体で30名程度であったという。学生の留学当時、教員は12名いたが、現在では3名になっているとの報告もある。語学学校としては小規模である。

IELPの授業内容については、渡米直後の秋学期はリスニングとスピーキングは難しいものの、授業内容のレベルが低いと感じたという。留学初期のクラスについて、このような感想を述べる学生は過去にも複数名いた。プレイスメントテストで結果が出ずに、中学校で習う英文法のクラスに所属させられ文法が易しすぎるといった問題が生じている。学生の四技能に大きく偏りがある場合に、こうした事態が起こると推察される。しかし、春学期はクラスのレベルが上がったため課題やプレゼンテーションの機会が多く、充実した授業内容であったという。英語圏に留学する学生には、プレイスメントテストで結果が出せなければ、本来の実力より低いクラスに配属される可能性があると伝えているが、そのことを十分に理解させ留学前の英語学習に真剣に取り組ませる必要がある。

IELPが用意するアクティビティについては、スカラシップ生は利用していないためデータがない。アメリカ人の友人を作るために留学生との交流を断ち、クリスチャンが主催するConversation Clubに参加したり、ジムで知り合った大学生や社会人と出かけるなど、現地の人々と積極的に行動を共にするようにしていたという。こうしたケースは珍しく、実際に学生は英会話を中心に飛躍的に上達している。しかしこの学生からも、語学学校での一年の学習期間は長すぎるという不満が聞かれた。

もう一つのIELPの問題点は、交通機関の不便さである。学生は基本的に車で移動をする。キャンパスが街から離れていることもあり、文化的な面ではあまり恵まれていない。唯一の良

い点は、留学生に日本人がいなかったことから、英語漬けで勉強に集中できる環境であるということだ。

3. 今後に向けての提言

以上、直近の流通科学部海外留学スカラシップ制度利用者への聞き取り調査の内容をふまえて、本制度の今後について考えてみたい。制度の充実と学生の満足度、帰国後の学部への貢献、就職への影響という観点から、以下の三点が検討課題として挙げられる。

1. スカラシップ留学から帰国した学生に聞き取り調査を行い、協定校の学習環境と研修内容を確認する。その上で、同校に継続して奨学生を派遣するか、次年度学生には別の協定校を推薦するか検討する。次年度の学生に、より良い協定校を推薦できるように教員・職員間で情報を共有する。
2. 長期派遣の形態について再検討の余地がある。1年派遣の場合、後半に学部授業の聴講やインターンシップやボランティア活動を取り入れるなど、語学以外の学びの機会を提供することで、学生の精神的成長ならびに学問的知識の向上を図る。
3. 留学前後の英語学習に関して、スカラシップ生の英語運用能力の向上に寄与する学習の機会を提供する。新カリキュラムにおける選択科目 (Intermediate English, Advanced English) の内容を検討すると同時に、eラーニング導入の可能性を探り、語学カフェとぐるーぱる広場の有効的活用について、さらなる工夫を図る。

本スカラシップ制度の将来的な N-HAL プログラムとの統合も視野に入れ、早急に流通科学部の特色を生かした留学制度を整えていく必要がある。魅力ある留学制度により将来性のある優秀な生徒の獲得へと繋がっていくことが期待される。

参考文献

- オーストラリア留学センター「クイーンズランド大学付属英語学校」
<https://www.wavenetwork.com.au/school/details.html?id=bris13>
- 国際交流・社会連携課「中村学園平成30年度流通科学部海外留学スカラシップ制度について」
---、「平成30年度流通科学部海外留学スカラシップ制度 派遣留学生一覧」
- 国際交流課・就職課・流通科学部「流通科学部海外留学スカラシップ派遣留学生一覧（平成21年度～）」

ウェブページ

- 栄陽子留学研究所「アメリカ留学のための大学情報サイト：アーカンソー州立大学」
<https://www.ryugaku.ne.jp/search/data?scid=2400016>
- Citizenship and Immigration Canada*
<https://www.canada.ca/en/services/immigration-citizenship.html>
- Simon Fraser University (SFU) English Language and Culture Program (ELC)*
<https://www.sfu.ca/elc.html>
- The University of Queensland, Institute of Continuing & TESOL Education*
<https://icte.uq.edu.au/>
- University of Arkansas*
<<https://www.uark.edu/>>
- University of Arkansas at Little Rock, Intensive English Language Program (IELP)*
<<https://ualr.edu/ielp/>>